

第3分科会

リベラルアーツ教育の展望

報告者

- 毛利 勝彦** 国際基督教大学 教養学部アーツ・サイエンス学科 教養学部長／教授
室田 真男 東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院 副研究教育院長／教授
白 井 聡 京都精華大学 人文学部総合人文学科 講師

コーディネーター

- 大 川 淳** 京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科 講師

【参加者 85名】

本分科会では、今日の高等教育におけるリベラルアーツ教育が直面する課題と展望について、様々な視点から議論する。

今日の高等教育におけるリベラルアーツは、その意味において変奏を重ね多義的なものとなっている。こうした現状に鑑みて、リベラルアーツ教育が直面する諸問題と、教育現場で起こっている様々な課題について幅広く議論し、リベラルアーツ教育のあり方を複眼的に模索することを本分科会の目的とする。

リベラルアーツ教育の展望

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科 講師 大川 淳

1. 企画概要

マーサ・ヌスバウムは、著書『経済成長がすべてか？—デモクラシーが人文学を必要とする理由』（小野正嗣・小沢自然訳、岩波書店）の中で、国家が実用的な技能の養成を奨励し、その利益追求をし続けた結果、「人文学的な側面」が喪失されつつあると述べる（3-4）。ヌスバウムの警鐘にあるように、現在の大学教育は、産業社会との橋渡しとしての役割が拡大解釈され、従来のアカデミズムを担う自治組織として疲弊している現状があるといっても過言ではない。例えば近年の文部科学省主導のグローバル人材育成支援事業は、その一例と言えるだろう。なぜなら、「人材」（この「材」という漢字が与えるネガティブなイメージを強調しておきたいところであるが）を育てる教育、すなわち産業社会からの需要に迎合した教育をする空間としての大学のありかたが強く求められているからである。オープンキャンパスなどでは、就職率や、資格に対する質問が多く見られる。そうした質問は、現代社会における大学の役割があらさな変化を遂げたことの証左となっている。

また、それに伴い、アダデミズムを根底から支えてきたリベラルアーツという概念も、変容し、多義的なものとなっている。一方、社会が求める即戦力となる人材育成は、この不安定な時世の中、めまぐるしく変化する。リベラルアーツ教育は、そうした不安定な社会の需要に即した人材育成ではなく、むしろどの時代にも適応し、貢献できる人間力、そして個人個人の生き方そのものを豊かにする学問としても、もう一度再評価する必要があるのではないだろうか。そこで、現在大学における学問のありかたとその問題について見つめ直し、今一度大学教育の根底を担うものの一つとしてのリベラルアーツ、またはリベラルアーツ教育のありかたを議論し、そして多角的に見つめ直すことによって、リベラルアーツの意義を再認識する必要があるのではないだろうか。

また本分科会では、リベラルアーツを根本からまた実践的観点から再評価するものではあるが、やはり議論が抽象的になる傾向になる。しかし、こうした傾向を否定的に捉えるのではなく、むしろリベラルアーツが抽象的な議論を必要とし、そしてそうした性質を内包していることが前提となるのである。昨今の実学教育に陥りがちな大学教育では、資格や、検定といった、実学的あるいは社会の利益に対して即効性のある技能を養成することに力を入れているが、そうした具体的な成果から除外されるもの、あるいは、その余剰の部分に対してリベラルアーツが担っている役割を見出すことができよう。したがって、リベラルアーツの多義性、または様々な抽象的概念を受容する性質を議論することによって、リベラルアーツの深みを提示することになるだろう。そうすることによって、大学教育におけるリベラルアーツの重要性を再認識し、大学が担うべきリベラルアーツ教育の展望について議論したい。

2. 本分科会のスケジュール

午前の部

- 10:00~10:10 開会挨拶・趣旨説明（大川 淳）
- 10:10~10:50 第1発表 毛利勝彦氏
- 10:50~11:00 質疑応答
- 11:00~11:10 休憩・コメントシート記入
- 11:20~11:50 第2発表 室田真男氏
- 11:50~12:00 質疑応答

午後の部

- 13:30~14:10 第3発表 白井聡氏
- 14:10~14:20 質疑応答
- 14:20~14:40 休憩・コメントシート記入・回収
- 14:40~15:30 総括討論



3. 本分科会の内容

まず、分科会コーディネーターの大川より、開会挨拶及び、趣旨説明がなされた。

次に国際基督教大学、教養学部アーツ・サイエンス学科教養学部長の毛利勝彦氏によって、リベラルアーツの定義から議論していただき、また国際基督教大学におけるリベラルアーツ教育の展望、そして、グローバル社会における展望と今後の課題についてご発表いただいた。毛利氏は国



際基督教大学の理解として「学力の3要素」(Literacy, Logical and Critical Thinking, Competency)についての説明を踏まえ、どの時代にも通用する学生を涵養する教養力の必要性を強調された。さらに、毛利氏はエレノア・ルーズベルトの思想に基づき、グローバル社会に通用する学力の必要性について、国際基督教大学の Plurilingualism 教育の実践例などの紹介を交え、議論された。最後に「教養」と「実学」が対立するものではなく、教養が実学的であるということを説明することによって、この二項対立を脱構築する必要があることを毛利氏は説明された。

次にリベラルアーツ研究教育院副研究教育院長の室田真男氏によって、東京工業大学におけるリベラルアーツ教育の試みについて、カリキュラムを含めた教育現場について実践的な側面から議論していただいた。室田氏は自然科学系にも教養教育が必要であると説き、その実践例として、学士1年から博士課程に至るまでの教養科目を導入した東京工業大学の教育改革について紹介された。東京工業大学は、講義講義とグループワークを通じて、他者に表現することを学び、コミュニケーションスキルの涵養を目指した、東工大立志プロジェクトを立ち上げた。また指導、被指導の関係性を学年の垣根を越えて構築することによって、リーダーシップの養成を目指した学びの機会の創出について説明された。

最後に、京都精華大学人文学部総合人文学科の白井聡氏によって、現在の日本におけるリベラルアーツの現状における諸問題を多角的な視点から問題提起していただいた。白井氏は、社会学的背景からネオリベリズムが孕む人文学への憎悪について指摘し、人文学無用論がはびこる社会構造について説明された。また、富山和彦が提唱する大学の役割について分析し、産業社会が要求する大学教育の転換について批判しつつ、一方で学生の主体性の欠如は、消費社会に染まることによって生み出される受動性に起因することを指摘された。最終的に、アクティヴ・ラーニングもそうした受動性に迎合した側面があることを指摘し、この教育方法の転換が加速する中、従来の大学教育にみられた座学が批判されることに対し、異議を唱えられた。以上を踏まえ、白井氏は、大学教育が、学びの環境改善を通じて、学生に対し「間違った善意」を始動していることを指摘し、そうした「間違った善意」を排除することから、大学教育のあり方そのものを見直す必要があると議論された。

その後、総括討論を行い、パネリスト及びオーディエンスを交え総括討論が行われた。国際基督教大学と東京工業大学の教養教育の実践例にたいする質問から、アクティヴ・ラーニングに対する問題提起についてなど、非常に活発な議論となった。また、東京工業大学が行った教養科目に対する教育改革によって、書店の売り上げが増加したなど、非常に有益な効果をもたらすものとしてリベラルアーツ教育が担う重要性を再確認できた総括討論となった。

4. 本分科会まとめ

本分科会では、リベラルアーツの理念、教育実践例とその成果、そして現代社会が抱える様々な問題との接続性を探ることによって議論を行い、そして多くの反響をいただいた。また、非常に抽象的な議題にもかかわらず、多くの教職員の方々にご参席いただき、そして各発表後の質疑応答や、総括討論においても、様々な意見が活発に交わされたことから、リベラルアーツの求心性を、改めて感じる事ができた分科会となった。これにより、現代の大学教育におけるリベラルアーツを再評価する機会を提供できたのではないだろうか。

第3分科会コーディネーター：大川 淳（京都ノートルダム女子大学）

ICU's approach to liberal arts education in the 21st century

国際基督教大学 教養学部アーツ・サイエンス学科 教養学部長／教授 毛利 勝彦



ICU's approach to liberal arts education in the 21st century

Katsuhiko Mori, Dean of the College of Liberal Arts
International Christian University

1. What is liberal arts?

- Michelangelo and liberal arts
- Historical trajectory in the Japanese context
- ICU's understanding of "three elements of learning abilities"



"I saw the angel
in the marble and
carved until I set
him free." -
Michelangelo

Japanese Context

- 1894~1950: Liberal Education at Old-System HS
 - De-Kan-Sho
- 1950s~1960s: Introducing General Education
 - GE (H, SS, NS, Languages, PE) vs. Specialized Education
 - 1951 JUAA Report on GE
 - 1956 University Establishment Standards
- 1970s~1980s: Reflection of General Education and Flexibility
 - 1971 CEC S.46 Report
 - 1986 PM's Ad Hoc Council on Education
- 1990s~2000s: Globalization and Liberal Arts Revival
 - 2000 Univ Council Globalization Report
 - 2002 CEC Liberal Arts Education
 - 2007 School Education Law (3 Elements of Learning Abilities)
 - 2008 CEC Bachelor's Program Report (3 Policies)
 - 2020 Admission Reform (HS-Univ. Linkages)

Three Elements of Learning Abilities

- Basic Knowledge and Skills (Literacy) ➡ Basic Assessment
- Thinking, Judgement, Expression (Logical & Critical Thinking) ➡ Common Test
- Intentional Learning, Diversity, Collaboration (Competency) ➡ Secondary Screening

2. Dialogue with Eleanor Roosevelt

- Three principles of the Universal Declaration of Human Rights
- Globalization waves in the "Kingdom of Languages"
- Post-truth "world" and "reality"

UDHR

Article 1

All human beings are born free and equal in dignity and rights. They are endowed with reason and conscience and should act towards one another in a spirit of brotherhood.



Bilingualism

Japanese and English

Plurilingualism

2 + 1 of World Languages

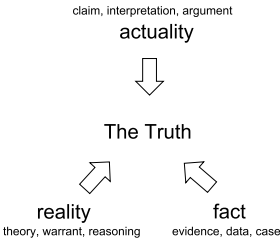
Eleanor Roosevelt’s message to ICU students

“Never close your mind to possibility of good in any people. Accept the reality of the world situation and always endeavor for greater understanding and greater ability to love our neighbors.”



Η ΑΛΗΘΕΙΑ ΕΛΕΥΘΕΡΩΣΕΙ
ΥΜΑΣ

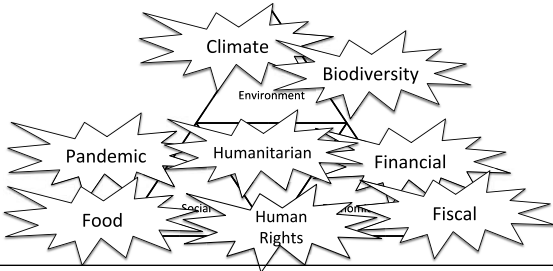
Then you will know the truth, and the truth will set you free. (John 8:32)



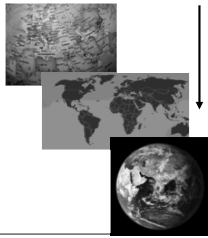
3. Crises of the 21st Century

- Reaching the SDGs by 2030
- Global neighbourhood: ontological turn
- Academic neighbourhood: epistemological turn

What crises are we facing?



Global Neighbourhood: Ontological Turn



- National Education → Citizenship Education
- Education for International Understanding → International Education
- World Studies → Peace Education, Human Rights Education, Multicultural Education, Development Education
- Global Studies → Global Citizenship Education, Environmental Education, ESD

"International" is not enough; "global" might be more appropriate for this university. - Tadaaki Yamamoto

Academic Neighbourhood: Epistemological Turn

- **Disciplinary Renovation** within disciplines
- **Multidisciplinary Innovation (+)** across multiple disciplines
- **Interdisciplinary Innovation (x)** involving two or more disciplines
- **Transdisciplinary Transformation** beyond disciplines

4. The Potential and Challenges Ahead

- "Sight outside of sight" in arts and sciences
- Reconsidering the debate on liberal arts vs. practical learning
- A moonshot of the "university of tomorrow"

Stepping out of your comfort zone!

*"Sight Outside of Sight" - Zeami's *The Mirror of the Flower**

Vocation, Profession and Mission

Liberal Arts Capstone and Diploma Policy

A moonshot of the "University of Tomorrow"

Backcasting as a "thrown project"



ICU where your angel is liberated



東京工業大学におけるリベラルアーツ教育の試み

東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院 副研究教育院長／教授 室田 真男



大学コンソーシアム京都
第23回 FDフォーラム
2018年3月4日

東京工業大学における リベラルアーツ教育の試み

室田 真男
東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院
副研究教育院長（教育担当）
murota@ila.titech.ac.jp



本日の内容

- 東工大の教育改革
- リベラルアーツ研究教育院（ILA）
- 「大きな志を育む」教養教育
- コア学修科目の概要

2

東工大の教育改革





科学・技術の力で世界に貢献するため、
学生自ら進んで学び、鍛錬する“志”を育てたい。
学長 三島良直

3

卓越した専門性に加えてリーダーシップを備えた 理工系人材を育成し、より良い世界を創る

卓越した専門性



- 数学・物理学・化学・生命科学など理工系基礎科目の充実による徹底した基礎学力
- 世界最高水準の科学・技術分野での基礎学力・専門能力
- 科学・技術により新しい社会を切り拓く気概

リーダーシップ



- 専門に加え教養も含めた幅広い視野
- 異分野・異文化を許容し協調するためのコミュニケーション能力
- グローバルな課題へ挑戦する力
- 世界に雄飛する気概と人間力

4

教育改革後の科目群

改革前	改革後
博士3年次	博士論文研究
博士2年次	博士論文研究
博士1年次	博士論文研究
修士2年次	修士論文研究
修士1年次	修士論文研究
学部4年次	学部専門科目
学部3年次	学部専門科目
学部2年次	学部専門科目
学部1年次	学部専門科目

ナシバリング

600講

500講

400講後半

400講前半 & 300講後半

300講前半

200講

100講

教養教育を
博士課程
まで必修化

5



リベラルアーツ 研究教育院

Institute for Liberal Arts (ILA)



16年4月に発足！

ILAの教養教育

「大きな志を育む」教養教育

- ・多様性に満ちた現代社会の中での自分の立ち位置を明確化

コア学修科目 + 多様な教養科目

重点分野

- ・コミュニケーション能力
- ・コラボレーション能力
- ・書く・読む・発表

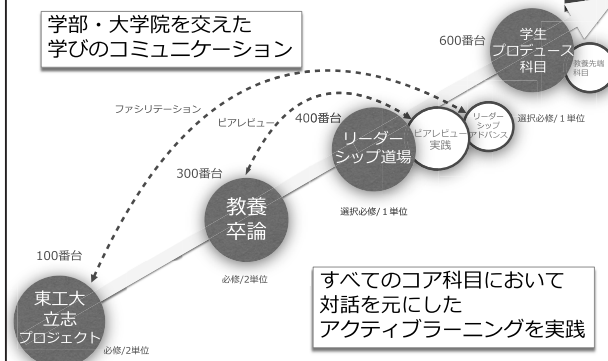
学士課程から博士後期課程まで

対話を元にした学び

7

教養教育のコア学修科目

学部・大学院を交えた
学びのコミュニケーション



8

東工大立志プロジェクト

学部1年生必修!

「東工大立志プロジェクト」は、学士課程入学直後に全学生が履修する必修科目です。教養教育を、各自のゴールに向かって志を立てるプロジェクトにとらえ、そのための自己発見と動機付けを行う科目です。講堂での大人数講義と、少人数でのグループワークを交互に行います。グループワークでは、自ら考え、問題を発見し、他者に表現することを通して、コミュニケーション・プレゼンテーションのスキルを高めます。



10

講堂講義×少人数クラス

- ・木曜の講堂講義後、月曜に少人数クラス
- ・少人数クラス
 - ・各28～30人。1～7類混成。
 - ・学生同士が話し合い、学び合う場
 - ・講義を聞き、宿題（要約と応答）を書いて持ち寄る
 - ・4人のホームグループを拠り所に
 - ・「えんたくん」など対話促進ツールを活用
- ・25人の教員がファシリテーター！
 - ・一学年1,150人の「アクティブ・ラーニング」型授業の実践
- ・ガイドブック（教科書）の発行

10

2017年度講堂講義ラインナップ

池上彰：良き問いをたてるために

美馬のゆり：RIKEJO的生き方のススメ：経験を通して学ぶ

平田オリザ：わかりあえないことから
コミュニケーション能力とは何か

藤田一照：「私だけの謎」を見つけよう！

佐々木紀彦：日本製エリートはどうすれば世界で勝てるのか

三島良直：私の志、これまでを振り返って

司会：上田紀行（リベラルアーツ研究教育院長）

11

学びのデザインのポイント

グループサイズ

- ・4人程度のホームグループ
- ・随時組み替え vs 固定
- ・ペア、他のグループ活動視察

問い

- ・サマリー（要約）とレスポンス（応答）
- ・レスポンスで一人称視点を
- ・これを基本に先生方が随時「問い」を工夫
- ・コースの最後に「学び」と「志」をプレゼン

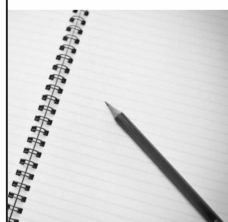
場づくり

- ・「えんたくん」の活用
- ・マーカーで「見える化」しながら話し合う
- ・相互発表

12

教養卒論

学部3年生必修！



「教養卒論」は、3年目に履修する学士課程教養教育の出口となる科目です。教養教育では、ひとりひとりが自分の目的にあった「学びのストーリー」を描きます。これまでの教養教育で何を学んだのか、またそれは今後の自分のビジョンにとってどう活かしていくのかをレポートにまとめます。執筆は、小グループ単位で修士課程の学生のピアレビューをうけながら行います。

平成30年度より実施

学びのコミュニティ：GSA制度

- 学びのコミュニティとは
 - 学びあい、教えあい、語りあいを通して、
 - 主体的に学習に取り組み、
 - お互いを尊重しながら、
 - 相互につながり、成長していく環境
- 大学院生アシスタント（GSA, Graduate Student Assistant）を育成し、学びのコミュニティ促進の中核に
- 全学での展開を目指す

現行の授業補助業務中心のTA制度から
主体的な学習支援を行うGSA制度への移行を目指す

14

GSA制度の概要

- GSA: Graduate Student Assistant
 - 大学院修士課程の学生を対象
- GSAに必要な基礎知識やスキルを教育
 - 授業やワークショップによる
- GSA Candidateとして実践
 - 学びのコミュニティに加わり、学びを促進
 - 学部学生のロールモデルとしての役割
 - 実践を通して自らも学ぶ
- ねらい
 - 人としての総合力、自分力を向上させる
 - 「学び方」を理解し、自らの学びを深める
- GSAプログラム（教育＋実践）を修了すると
 - 教育革新センターより、認定証が授与される



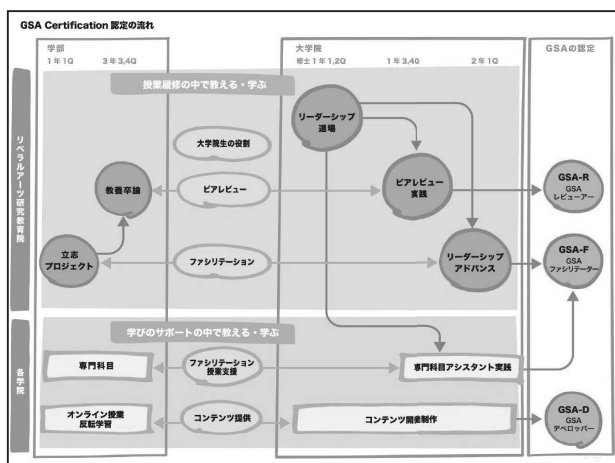
15

GSAの種類と役割

3種類のGSA

- ファシリテーター（GSA-F）
 - ファシリテーターとして授業に参画し、グループ活動や受講生の学びをサポートする
 - 受講生の主体的な学びを促すことを目指す
- レビューアー（GSA-R）
 - ピアレビューアーとして授業に参画し、受講生の文章作成をサポートする
- デベロッパー（GSA-D）
 - オンライン授業等で活用する教材制作を、教職員や他の学生と協働で行う

16



リーダーシップ道場

- 修士課程1年目の文系教養科目（選択科目）
- 仲間の能力を最大限活かしながら目標に向かってチームを導くリーダーシップ力を身につける
- GSAの基礎科目
 - ファシリテーション型リーダーシップ
 - サバントリーダーシップ
 - 合意形成、発想支援スキル
 - 読む、書く、プレゼンテーション
- リーダシップ道場履修者のうち、特定の要件を満たした学生は、実践段階に進むことができる

18

リーダーシップ道場の実施状況

2016年度

- ・6クラス開講（2Q）
- ・受講人数：約400人（修士1年生の約5分の1）
- ・80点以上で履修した人数：362人

2017年度

- ・12クラス開講（1Qに6クラス, 2Qに6クラス）
- ・受講人数：約750人

19

リーダーシップ道場の振り返り

- ・学生はとても意欲的に取り組んでいる
- ・得られたコメント例
 - ・リーダーシップには様々な側面があることを知り、私でも実践できそうであることがわかった
 - ・このようなタイプの授業は初めてで新鮮
 - ・普段研究室にこもってばかりいるので、専門が異なる学生と話ができることは楽しい
 - ・普段から様々なスキルを実践していきたい
- ・ただし、授業になじめない学生もいる

20

ピアレビュー実践

育成する能力

- ・論理的な文章の書き方
- ・ピアレビュースキル
- ・チュータリングスキル
- ・学士課程3年次の必修科目「教養卒論」執筆をサポート
 - ・来年度より
- ・2017年度は、試行授業により学部学生のエッセイ（小論文）をピアレビュー

21

受講生の振り返り

GSA-R Candidate

- ・書き手に書いた文章や書いた理由を話してもらい、問題点を探っていた。
- ・学部生へのレビューでは、自分の考えの整理もできて良かった。
- ・人の書いた文章を添削する経験は初めてであったが、とてもよい学びになった。

学部学生

- ・文章はきちんと書けていると思っていたが、レビューしてもらうことによって、自分がどれだけ勘違いをしていたかに気づいた。
- ・院生の方々のレビューが的を射ていて大変勉強になった。
- ・院生は言いたいことをコンパクトな文章で伝えるのが上手だと思った。

22

リーダーシップアドバンス

- ・GSA-F Candidateとしての活動
- ・ファシリテーターとしての知識を学び、実践を通して、ファシリテート力、学習支援力を身につける
- ・学部新生の必修科目「東工大立志プロジェクト」の少人数クラスへ、ファシリテーターとして参画
 - ・今年度より実施
- ・ねらい
 - ・ファシリテーターとしての経験を通して「学び」をより深く考える
 - ・学部新生に対するロールモデルとしての役割を担う

23

リーダーシップアドバンス 2017年度の実施状況

- ・履修人数：12人
 - ・期待より人数が少ない
 - ・意欲のある学生が履修
- ・2人組6ペアを構成し「東工大立志プロジェクト」の少人数クラス6クラスに参画
- ・教員と学部1年生との橋渡し役として有効に機能
- ・ファシリテーターとして、責任をもって授業をリードする経験により大きく成長
- ・履修人数をどの様に増やすかが大きな課題

24

博士教養科目

- 東工大の教養科目の最終地点にあたる，博士後期課程の学生向けの科目
- 社会人博士に配慮し，土曜日に開講
- 英語開講

教養先端科目（2Q, 3Q, 4Q）

- 最先端の研究の「種」や高度な教養的知識を，グループによる研究や発表を通じて共有する
- ポスターセッション形式の発表の場は，ながら「学会の大会」
- 各クォーターごとに，200名程度が受講

25

博士教養科目

学生プロデュース科目（1-4Q）

- 学会の大会運営者のように，テーマの選定，会場の手配，グループ編成，プログラム等の検討，準備を進め，「大会」当日の運営を担当する
- 最終日のポスターセッションと，シンポジウムを企画・運営
 - 総務委員会
 - 企画委員会
 - 編集委員会
- 履修者は，50名に制限

26

ポスターセッションとシンポジウム



Poster presentation
Voting for award

Symposium:
Special lectures
Award ceremony



博士教養科目テーマ

2016年度
東京防災を超えて



2017年度
NO POVERTY（SDGsより）

2Q: Resources
3Q: Equality
4Q: Health



28

リベラルアーツ教育は何を目指すのか？

京都精華大学 人文学部総合人文学科 講師 白井 聡

リベラルアーツ教育は何を目指すのか？

白井 聡（京都精華大学人文学部講師）

リベラルアーツの定義とブーム

- ・ 自由七科（古代希）（文法、修辭、論理、算術、幾何、天文、音楽）
- ・ 自由人の育成
- ・ 教養課程のリベラルアーツへの再編？ リベラルアーツ・ブーム？
その成果：なし
理由：産業界は「自由な人間」など求めていないから

ネオリベリズムと人文学への憎悪①

- ・ ネオリベ時代の文化英雄たちの文化・教養観（三木谷浩史楽天社長、夏野剛ドワンゴ取締役の対談より）

三木谷：英語化は楽天の英語化であったり、今のTOEFL化とかで、結構うまく世の流れを少しは変えられたかなと思っているので、次はちょっとプログラミング、日本国民のプログラミング力を上げるというプロジェクトを。

夏野：賛成だな。僕はやっぱり中学くらいからやらせるべきだと思う。別に日本史なんか教えなくていいから。だって間違っていたんだもん。この間びっくりした。源頼朝の絵あるじゃん。あれ違う人だったらしい。

三木谷：聖徳太子、いなかったかもしれないんだよな。

夏野：足利尊氏の絵も間違っていたらしいんだよな。武田信玄のダルマみたいな絵もなんか顔が違うらしいよ。俺が買った日本史はどこに行ったんだ！ みたいな。そんなのいらねーよと。意味ないよ。

ネオリベリズムと人文学への憎悪②

- ・ テクノクラットの理性と人文学無用論

富山和彦「G型大学／L型大学」論

「シェイクスピアより観光英語を、戦略論より弥生会計ソフトを、憲法・刑法より道路交通法・大型二種免許を、機械力学・流体力学よりロボットの工作機械の使い方を」

⇒労働人口は「グローバル人材」と「その他大勢」に二極化する。後者は前者に奉仕する低賃金の奴隷的労働に従事するしかない。少しは役に立つ奴隷にしてやろう。

学生はこの提案に反論できるか？：読書ゼロの大学生が53.1%（最新統計）

日本的反知性主義の表れとして人文学への憎悪

- ・ 理論信仰と実感信仰（丸山眞男）

- ・ ルサンチマンの標的としての人文学

「大学で何も勉強しなかった」ことが自慢の日本のオジサンたち

- ・ 四等国のコンプレックスと科学技術信仰

近代科学を徹底的に技術的なものとして導入したことによる成功とそのツケ（山本義隆『近代日本一五〇年』）

大人のいない国で

- ・ 学生たちはどんな大人に大学で出会うのか

例1：「スーパーグローバルユニバーシティ」を名乗ることのできる「知性」

例2：大阪大学OJ拠点「人間力活性化によるスーパー日本人の育成拠点」

- ・ 社会的関心の蒸発

「最近の学生は社会的関心が薄い」（大学教員の愚痴）

「社会などというものは存在しない」（マーガレット・サッチャー）

⇒存在しないものに対しては関心を持ちようがない、せいぜい年金問題

- ・ 消費社会の最高形態

「子供⇒青年⇒大人⇒老人」を「子供⇒老人」に短絡

何から始めるべきか

- ・ 安倍晋三氏によって体现された時代精神
「やってる感が大事だ！」
- ・ ゴミを全部捨てる事＝「教育者の善意」でやっていることを疑うこと
例1: 主権者教育
例2: アクティブラーニング

ご清聴ありがとうございました
